

## 英語教育における小中連携

—ひとつの取り組みから見えるもの—

English Education at Elementary School in Cooperation with Junior High School

熊ノ郷 朋子

KUMANOGO Tomoko

(有田市立保田中学校教諭)

2003年11月に行ったA市立B小学校とC中学校における英語教育の小中連携の取り組みを分析し、その成果と問題点を明らかにし、小学校と中学校における英語教育について考える。

キーワード：「小学校英語教育」「小中連携」「入門期指導」

### 1. 小学校英語活動と中学校英語教育

現在、大阪府河内長野市の天野小学校と西中学校のように、小中連携の研究が始められている。平成15年には、上記の2校で研究発表会が開かれ、その研究は広がりを見せている。

しかし、英語教育における小中連携の研究は、ほとんどが文部科学省指定のものであり、小学校の教師はどのように英語活動を行っていけばいいかを悩み、中学校の教師は小学校で何が行われているのか知らないというのが現状ではないだろうか。

中学校には英語指導における教材、指導法などの知識の蓄積がある。小学校には受験英語にとらわれない音声を中心とした英語教育の可能性がある。両校が共に学校を開き、その実践を交流させることで、より効果的な英語教育が展開できるのではないかと考える。

本論文では、平成15年に行ったA市立B小学校とC中学校での小中連携の実践を取り上げ、その成果と課題を明らかにし、小学校英語活動と中学校英語教育の効果的な連携について考えていきたい。

### 2. 小中連携の実践

—A市立B小・C中の取り組み—

#### 2.1. B小学校の英語活動

A市は、和歌山県中部の沿岸部にある中都市である。B小学校の校区は、以前は農村地帯であったが、

近年宅地化の波がおしよせ、児童の保護者層も勤労者世帯が非常に多くなってきている。また、農家も兼業化が進み、専業農家はほぼ皆無である。

B小学校は1学年約90名程度の学校である。英語活動は「総合的な学習の時間」の中に位置づけられており、特に高学年に力点をおいて活動が進められている。各学年で英語活動の年間計画が立てられ、月1～2回ペースでALTと担任とのTTで英語活動の授業が行われている。また、週1回昼休みに全校で英語の歌を歌う時間なども設定している。英語活動の主任の先生を中心に、英語活動についての現職教育を行うなどして、全職員での英語活動についての研究を深め、共通理解を図っている。

#### 2.2. 中学校教師による英語授業

平成15年11月、C中学校の英語教師3名がB小学校で英語の授業を行った。B小学校とC中学校は隣接しており、C中学校の校区にはB小学校しかないため、ほとんどの生徒はC中学校に入学する。道をはさんで向かい合うように建つ両校だが、お互いの教育実践について交流する機会はほとんどない。今回のように中学校の教師が小学校で授業をするのは、おそらく初めてではないかと思われる。

授業は、6年生3クラスの各クラスで行い、担任教師と中学校の教師とのTTの形態をとった。授業実施1ヶ月ほど前に、中学校の教師は小学校の各クラスの授業を参観し、小学校の教師は中学校の英語の授業を参観した。授業の言語材料はwhoを使った疑問文とその答え方を扱った。それぞれのチームで授業案を作成

した。

3クラスとも、同じ言語材料ではあるが、授業展開はそれぞれ異なった。視聴覚機材を使う授業、英語のリズムに重点を置き、太鼓を使って音読を中心にした授業、クイズ形式で会話を行う授業などであった。

### 2.3. 授業の成果と課題

成果

- 1) 取り組みを行った小学校の教師は、「英語の授業」の経験が少なかつたため、今回、中学の教師と授業をすることで、授業の技術面で得たものがあった。授業者のひとりであるO教諭は「授業計画の立て方や、英語の授業の展開技術など、自分の知らなかったことがわかり、今後の授業の参考になった。」と述べている。
- 2) 中学校の教師にとっては、小学校での英語活動を知る機会となり、次年度に入学してくる生徒理解にも役だった。中学校教師のM教諭が「自分が思っていた小学生とは感じが違った。」と述べているように、「小学校ではこうであろう」という中学校側の想像を浮き彫りにし、実際の小学校の現状を認識する機会になったと言えるであろう。それは、中学校での英語の入門期指導を考える上で、重要であると考えられる。

課題

- 1) 小学校教師（担任）とのTTではあったが、ほとんど中学教師主導による授業であった。もちろん、中学教師主導ではいけないということではないが、今回の授業では、中学の教師は「中学校における英語授業」を行ったと言っても過言ではないだろう。中学教師にとって、扱う言語材料の定着を目指し、繰り返し練習させ、覚えさせようということは日々行っていることであり、そのことに疑問を感じないであろう。しかし、小学校の英語活動は「総合的な学習の時間」に位置し、その目標は教科である中学校のそれと同じではない。中学校の教師が小学校で授業をすることで英語活動が中学校の授業のようになってしまったら、小学校英語活動で危惧されている「中学校の前倒し」になってしまうのではないだろうか。そのことを中学教師がどこまで理解しているか、小学校教師とどこまで話し合ったか、など検討すべきである。
- 2) 今回1回授業したが、その後中学校教師との授業は行っていない。両校ともに行いたいという意欲はあるが、現状では無理である。小中連携を効果のあるものにするためには、継続的な実践が必要

である。しかし、そのためには、教師の加配などの制度面での充実が必要である。

### 3. 小学校英語活動を受けてきた新入生

2004年4月、B小学校で1年間英語活動を行ってきた生徒がC中学校に入学した。生徒の現状は、次のようである。

- 1) 英語に対する新鮮な思いが感じられない。簡単な会話には慣れていて、英語の音を聞き分ける能力も、今まで筆者が担当した1年生よりも優れていると感じる。しかし、1年生の4月の教室にあふれる興味や関心の雰囲気が少ない。「英語は嫌い。英語は難しい。」という声を1年生の最初の授業で聞いた。
- 2) 4月において生徒の英語の学力差が大きい。これは、小学校での英語活動だけの影響ではないが、小学校では、活動はするが、英語が定着したかの評価はしていない。もちろん、そのような評価は「総合的な学習の時間」である以上行わないのかもしれない。しかし、授業で行った英語をマスターした生徒と、そうでない生徒が生まれているのは事実である。また、もし、「小学校で英語をやっているから」と英語塾など学校外の英語教育への参加に拍車をかけるなら、今後、1年生における学力差を中学校教師は重要視しなければいけないであろう。

今後、追跡調査や他の中学校の生徒との比較などを行い、さらに研究を深めたいと考えている。

### 4. これから両校に求められること

#### 4.1. 小学校に求められること

小学校の英語活動が小学校教育の中でどのように位置づけられるのか、各学校が考えていくことが必要である。教科ではない以上、英語活動は必ずしなければならない活動ではない。それでも、英語活動を「総合的な学習の時間」の中で行うなら、その意味、目的を明確にしなければならないであろう。先の実践で中学校教師主導の「中学の前倒し」的な授業になってしまったのも、小学校教師が「なぜ英語活動を行っているか」をはっきりと認識していないからではないだろうか。また、目標や意味を持っていたとしても、「英語教育」を行っていない教師の自信のなさから、中学校教師にそれを伝えることが出来なかったのではないか。これは外部講師と授業をする場合も同じであるが、英語の指導法など技術的な面で経験がなくても、小学

校の教師が「なぜ英語活動を行うのか」を主張すべきであるとする。そのためには、単発的な授業を個々の教師が行うのではなく、学校の教育活動における位置づけ、目的、年間計画などを全職員で考えていく必要があるであろう。

#### 4. 2. 中学校に求められること

まず、小学校で英語活動がどのように行われているかを知る必要がある。また現在、中学校における入門期指導を考え直す時期にきていると考える。中学校1年生の教科書は簡単なあいさつ、アルファベット、単語など今までと同じように作られているが、各学校の生徒の実態に合わせて教師が作り直していくことが必要ではないかと考える。小学校英語活動とともに、学校外での英語教育も今まで以上に広がっていくであろう。そうなれば、生徒の英語の学力、意欲など、個人差がますます大きくなるであろう。そのような現状において、今までのように、生徒を横並びにして、「みんな一緒にABCから」では、その個人差に対応できないであろう。違いを認めながら、集団の中でどう学びを共有していくか、新しい「入門期指導」を研究していく必要があるであろう。

#### 5. おわりに

ひとつの実践から、英語教育における小中連携を考えてみた。確かに校種の違いを超えて研究することは難しい。しかし、その違いから見えてくる問題とその解決方法があるのではないだろうか。

本論文でもいくつかの成果と課題を述べた。これらは、小中連携を実践したことにより、はっきりしたものである。小学校英語活動にはさまざまな課題がある。しかし、実践を積み、それを分析し、また次の実践に生かすことで英語教育は少しずつであるが、確実に進歩していこう。

そして、小中学校の教師だけでなく、英語教育の研究者とともに、連携して研究をすることで、英語教育における小中学校の連携が成果をあげていくと考える。